

伊藤奈緒著「教育による日本再興論(Ⅱ)―教育は人と社会と国の未来を決する―」IBCパブリッシング 2023年5月4日刊を読む

難関国公立大学の合格難易度は極めて高い水準に

1. (1)では、国公立大学についてはどうでしょうか。

(2)確かに近年では、文科省が促していることもあり、国公立大学の総合型・学校推薦型選抜についても入学者が増えてきているような印象があるかもしれません。

(3)しかし最新の数値を見ても、国公立大学での一般選抜による入学者は77.6%なのに対し、学校推薦型は16.2%、総合型は5.8%を占めるに過ぎず(2022年度文部科学省の資料による)、

(4)実はその割合は、ここ10年ほど大きく変わってはいないのです。



2. (1)しかも、国公立大学の総合型・学校推薦型には、学力不問の選抜はありません。

(2)学校推薦型も共通テストの結果が必須条件になっているケースが多く、年内に合格が決まるから早くラクができる……というケースはほぼありません。

(3)また、評定値が高い水準に設定されている医学部・薬学部などの場合は、高校入学時から地道に努力して、全ての定期テスト・全ての教科・科目で高成績を取り続ける必要があります。

(4)しかもほぼ全ての受験生は、推薦と一般選抜の準備を並行して行いますから、実際、学生にとってその負担はとて大きくなっています。

(5)東大・京大のように、一般選抜よりも総合型・学校推薦型で合格する方が、はるかに難度が高いケースもあります。

(6)そういうわけで、高1・高2の段階で一般選抜一本に絞って受験勉強を進めていく人が多いのが実情です。

(7)以上のように、国公立大学の総合型・学校推薦型選抜は、私立とは性格が著しく異なるものなのです。



3. (1)では、国公立大学の一般選抜はどうでしょうか。

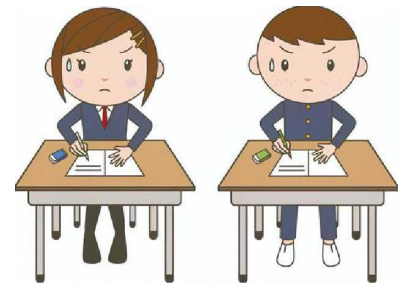
(2)たとえば難関国公立大学の一般選抜の競争倍率は、3倍前後と一見低く見えますので、「意外と受かりやすいのでは？」と思われるむきもあるようですが、それは違います。

(3)なぜでしょうか？国公立大学は難関になればなるほど、問題の難易度が上がるだけでなく、受験で課せられる教科・科目数が多くなります。

- (4)そこで難関国公立大学を目指すには、早いうちからたくさんの教科・科目を並行して勉強しなくてはなりません。
- (5)目標を下方修正するのは簡単ですが、上方修正するためには教科・科目を途中から増やす必要があり、高校教育や大学受験の実情から考えると、それは事実上不可能に近いのです。
- (6)したがって、出願する時点で、受験者はすでにふるいにかけられた精鋭ぞろいですから、倍率は高く見えなくても、その間の競争は半端なく厳しくなっています。
- (7)こうして考えていくと、難関国公立大学の合格難易度は、これからは極めて高い水準で維持されると言わざるを得ないのです。



4. (1)以上、日本の大学入試を取り巻く情勢がいかに変化してきているかをご説明しました。
- (2)ここからわかること、それは、入学するために越えなければならないハードルが高ければ高いほど、その大学に入学する価値もまた高いということです。
- (3)そして、厳しいようですが、その反対も成り立ちます。人生の大切な時期である大学時代に、良い環境に身を置いていることがいかに大切かを考えれば、敢えて難関に挑戦するのは、実に価値ある選択だと私は思います。



5. (1)しかし、最近は、「できるだけリスクをとりたくない」「高い目標のためにたいへんな努力をするようなことはしたくない」「しんどい思いはしたくない」……という高校生・ご家庭が増えているように思います。

(2)部分最適と言いますか、確証バイアスにとらわれ自分にとって都合の良い情報だけを拾って鵜呑みにし、安易に意思決定する傾向が、コロナ禍もあいまって顕著になっているように思います。

(3)かたや、全体最適を意識して、絶えず広い世界に目を向け、情報収集や向上努力を欠かさない人たちも確かにいます。

(4)このような現実を目のあたりにするたび、今の日本では、社会の「分断」が激しく進んでいるのではないかと、そして「分断」されている人々の「孤立」化が進んでいるのではないかと……そのような不安がぬぐえません。



(5)私が意見の発信を続けているのも、この状況を何とかしたい！大好きな日本が良くない方向に進んでいるのを何とか阻止したい！という気持ちからなのです。

P55 ~ 58

<コメント>

真の学力である「主体的に学ぶ力」を自分自身の努力で身に付け、「多様な選択肢のある人生を歩む」ために、伊藤先生の本書をじっくり読み込むことを、すべての受験生・保護者、受験指導を担当するすべての先生方におすすしめします。

2023年5月23日(火)林明夫